

2021年10月3日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 86 : 1～10

ルカによる福音書 18 : 15～17

「乳飲み子のように」

<神の国に入る者とは？>

イエスさまは言われました。「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

神の国とは、神さまのご支配のことです。それは、わたしたちが、神の御子イエスさまの十字架の苦しみと死によって、神さまに対する罪を赦され、神さまの命と恵みのご支配に生きるようになること。神さまの御許で、神さまと共に生きる者になる、ということです。

そして、やがて終わりの日に、神の国が完成する。神さまが救いを完成させて下さる。イエスさまの復活に続いて、わたしたちも復活と永遠の命が与えられる。そのことを信じて生きることです。

この神のご支配に入るため、神の救いの恵みをいただくためには、イエスさまは、子供のように神の国を受け入れる人でなければならない、とはっきり言われました。

一体、「子供のように神の国を受け入れる人」とは、どういう人のことなのでしょう。純粹無垢でなければならない、ということでしょうか。素直な者でなければならない、ということでしょうか。

わたしたちは、「こういう人でなければならない」と言われると、では、そういう人にならなければ。そのためには、どうなればいいんだろう。何をすればいいんだろう。そんな風に考え始めます。

さて、神さまの恵みに生きる人、神さまに救われる人、終わりの日に神の国に入る、「子供のように神の国を受け入れる人」とは、一体どういう人のことなのでしょう。

<子供、乳飲み子という存在>

イエスさまがこのことを話されたのは、ある出来事が起こったためです。

それは 15 節。「イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちは、これを見て叱った。」

今日の出来事の記事は、実はマタイやマルコ福音書にも書かれています。そこでは、どちらもここは「人々は子供たちを連れて来た」となっています。

しかし、その「子供たち」となっているところを、あえてルカは「乳飲み子」と記しました。これは、本当に生まれたばかりの赤ちゃんを指す言葉です。場合によっては胎児を指すことさえあります。

このような、殆ど生まれたての赤ちゃんを、人々はイエスさまに触れていただくために連れて来た、というのです。触れていただくため。それは、イエスさまから祝福をいただくため、ということです。

ところが、イエスさまの弟子たちは、これを見て叱りました。

おそらくこの時、イエスさまの周りには、他にも様々な人々が集まっていたと思われます。

イエスさまに病を癒してもらいたい人、悪霊を追い出してもらいたい人。お話を聞きたいと付いて来た人。そして、敵対して論争を仕掛けてくる人…。

しかも、イエスさまは弟子たちに、やがて来る御自分の十字架の苦しみと死を予告し、今はその時に向かって、エルサレムへと旅をしている途中なのです。

弟子たちからすれば、不安と緊張感の続く旅であったでしょう。また、多くの人々を相手に、多忙を極めるイエスさまを間近で見ているのです。こんなところで、子供なんかに構っておられる暇などない！ここは乳飲み子なんかを連れて来るところではない！そう思って叱ったのではないのでしょうか。

さて、この「子供」という存在。現代では、子供は宝物のような存在であり、何より優先され、権利が保護され、大事にされるべき存在です。

しかし、当時のユダヤ人における「子供」の位置は、とても低いものでした。子供は人間として不完全であり、まだ理性がなく、何より神の律法を守ることが出来ません。そのゆえに、存在価値が十分に認められていないのです。ですから、子供は父親の所有物であり、尊厳も、何かを主張する権利もありません。

ましてや「乳飲み子」は、当時の環境では無事に成長できるかもどうか分からない、まったく無力で弱い、最も小さな価値しかない存在だったのです。

そんな乳飲み子たちまでも、多くの人々が、イエスさまのところに連れて来た。それを弟子たちは叱ったのです。

…思えば、現代であっても、大人の会議の場であるとか、何か厳粛な場所に、子供を連れてくるのはどうなのか、と言う人がいたり。公共の場で、子供がわめいたり、赤ちゃんが泣いたりするのを見て、嫌な顔をする人がいますね。

弟子たちも、ましてや今より価値が認められていない子供や、乳飲み子に対して、そんな態度だったのかも知れません。

<乳飲み子を呼び寄せる方>

ところがイエスさまは、その乳飲み子たちを呼び寄せられました。招かれました。マルコ福音書では、その時、イエスさまは弟子たちに対して憤った、とまで書いてあります。

そして言われたのです。16節「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」

救い主であるご自分の御許に、その乳飲み子たちを来させなさい、と言われた。その最も小さい者たちを、ご自分の許に招かれた。そして、神の国、神のご支配は、この乳飲み子のような者たちのものだ。そう言われたのです。

神の国、神さまの救いは、乳飲み子たち、そして、乳飲み子のような者たちのもの。

…それは、どういうことでしょうか。ここで、ルカが「子供」をあえて「乳飲み子」と書いて強調したかったことが浮かび上がります。

それは、乳飲み子は、自分で歩くことも、食べ物を得ることも、何かをしようと意志することさえも出来ない。まったく何にも出来ない者だ、ということです。

赤ちゃんは、ただお腹が空いたらひたすら泣いてミルクを求め、お母さんが与えてくれるものを無心で飲み込むだけです。自分の力で、生きるために必要なものを手に入れることは出来ず、ただ与えられたものだけで生かされています。ただ、求めるだけ。ただ、受けるだけ。それが、乳飲み子です。

そして、イエスさまは言われたのです。「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

つまり、ただ母親から与えられたものを受け取ることでしか生きることが出来ない、そんな乳飲み子の姿こそが、神さまの御前に立って救いの恵みを受け取る、わたしたちの姿でなければならない、ということなのです。

お腹が空いてミルクを求めた乳飲み子が、お母さんからミルクを差し出されて、これは本当に飲むに値するかどうか、などと考えたり、疑ったりするのでしょうか。それを飲まなければ死んでしまうのに、与えられたミルクを拒否する乳飲み子がいるのでしょうか。ミルクをもらうために、自分が良い子であると主張する乳飲み子がいるのでしょうか。

わたしたちも、神さまの救いがなければ、罪に滅びてしまうのです。神さまに生かされなければ、生きることが出来ないのです。それなのに、なぜ、与えられている神の命の御言葉を、疑ったり、評価したり、拒否しなければならないのでしょうか。

神さまは、わたしたちの罪を赦し、滅びから救い、命を与えようとしておられるのです。その救いの実現のために、決定的なこととして、神さまはご自分の御子イエスさまを、救い主としてわたしたちに与えて下さいました。イエスさまは、わたしたちを生かし、罪を赦し、永遠の命を得させるために、神さまが与えて下さった救い主です。

わたしたちは乳飲み子のように、ただこの恵みを受け取ることで命を得ます。

実際、自分では何もできない者です。罪から離れることが出来ない。自分の罪を拭うことも出来ない。自分で救いへ向かって歩いて行くことも出来ない。

でも、そのようなわたしたちのために、イエスさまが来て下さり、わたしたちの罪を贖い、新しい命を与え、自分で正しく歩いて行くことが出来ないわたしたちを背負って、天の父なる神さまの救いの御許へと連れて行って下さるのです。

イエスさまが、わたしのために救いの御業を成し遂げて下さるのですから。わたしたちは、イエスさまに頼って、身を任せるばかりなのです。寄り縋るばかりなのです。恵みをただ、いただくばかりなのです。

わたしたちが、神さまに救いを求めるなら、それは必ず与えられます。

神さまは、母親が乳飲み子を見つめるように、いつもわたしたちを見つめ、いつもわたしたちの声を聞き、生かすために、喜んで良いものを与えようとして下さっているのです。

ですから、わたしたちは、神さまから与えられるものを、喜んで、無心に受ければ良いのであり、用意され、差し出されている救いの恵みを、疑ったり、拒否したり、無視したりてはならないし、また、対等に何かを差し出そうとしなくても良いのです。

ただ、神さまから与えられる恵みを受け入れること。それが、子供のように、乳飲み子のように、神の国を受け入れるということなのです。

<ただ神さまの恵みによって>

さてここで、わたしたちの心の中には、「では、わたしは乳飲み子のように、ひたすら受ける者にならなければいけない」と、固く決意する思いが浮かんでくるかも知れません。

しかし、どうやって？と聞きたいのです。これはもう、わたしたちの悲しい性と言って良いでしょう。結局わたしたちは、やはり自分が救われるために、自分が何かしなければならぬ、何者かにならなければいけない、と思っているのです。

「受け入れる」というわたしたちの行ないが、わたしたちを救うのではありません。受け入れる、というのは、わたしたちの頑張りや、努力のことではありません。

喉がカラカラに渴いた時に、水をもらって飲むことを、わたしたちは「頑張る」とか、「努力する」とか言うのでしょうか。喉を潤すために与えられた水を、ただ無心に飲み込んで、それからやっと、ああ生き返った、と実感できるのではないのでしょうか。

同じように、神さまの恵みを受け取る時も、罪と滅びに捕らわれている中で、わたしたちは、ただ神さまから注がれる恵みを、ひたすら受け取るしかないのです。

そうして、罪を赦され、新しく生かされていることを知った時。そこでやっとわたしたちは、救いの恵みを喜び、感謝し、礼拝し、神さまに応答することが出来るのです。

そしてそれは、神さまに命を創造されたわたしたちの、本当の、本来の、命の在り方、生き方なのです。

わたしたちは、神さまの恵みがなければ、神さまの罪の赦しがなければ、神さまの愛と憐れみがなければ、一秒たりとも自分の力では生きられない者です。

だからこそ、神さまがわたしたちに恵みを注ぎ続けて下さっていること。罪の赦しを与えて下さっていること。復活と永遠の命を約束して下さっていること。それを、わたしたちは、神さまの御言葉を通して、イエスさまの十字架と復活の御業を通して、いつも正しく知らさ

れる必要があるのです。

わたしたちは、自分がこの神さまの恵みの許にあると知ったなら、そこに本当の安心を見出すことが出来ます。それは、この世のものでは得られない安心です。

たとえ、人生や日々の中に、様々な苦しみや悲しみを覚えることがあっても、どんな危険や困難があっても、不安や悩みがあっても。それでも自分は、常に良いものを与えようとして下さる神さまのご支配の中にある。その真実が、わたしたちの心を、命を、慰め、励まし、支えてくれるのです。

わたしたちは、いつもこの神さまに助けを求めることが出来るし、神さまに感謝することが出来るし、神さまの恵みの力で、生きていくことが出来るのです。

神さまからしたら、わたしたちはまことに乳飲み子です。神さまは、わたしたちが何か良いことをしたから、ミルクを下さるのではありません。神さまが、わたしたちの命を創造して下さったのであり、わたしたちが愛しくて、憐れで、大切だから、神さまの方から、豊かな恵みをすすんで、喜んで、与えて下さるのです。神さまの方から、わたしたちに、神の国を喜んで与えたいと、望んで下さっているのです。

神さまの救いの恵みは、ただ一方的に、神さまの愛と憐れみによって、わたしたちに与えられています。

「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

それは、神さまの愛と憐れみによってしか、神さまの恵みを受けることでしか、わたしたちは神の国に入ることが出来ない、ということなのです。

この神さまのわたしたちに対する愛と憐れみが、神の御子イエスさまの十字架の死と復活に現わされています。わたしたちはイエスさまによって、神の国を与えられています。救いへと呼び寄せられ、招かれています。

この、神さまの救いを確かに受けること。すでに実現して下さった救いの恵みに、心から信頼して、感謝して、神さまにお応えすること。その「しるし」が、信仰を告白し、洗礼を受けるということなのです。

そして、イエスさまの救いにあずかった者は、生涯、神さまを礼拝し、生涯、神さまの恵みによって生き、この世の歩みを終えても、終わりの日が来ても、なお与えられる復活と永遠の命に、生かされていくのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちは、あなたの深い愛と憐れみによってしか、神の国に入ることが出来ません。
わたしたちは、乳飲み子のように何も出来ず、ただ憐れみを求め、そして受けることしか出来ない者です。

しかし、神の国はそのような者たちのものだと、イエスさまは教えて下さいました。

あなたの恵みによって、イエスさまの十字架と復活の御業によって、聖霊の導きによって、神の国に生きる者として下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン